



No.105

2017年6月30日

公益社団法人日本山岳会富山支部

第32回播隆祭を開催 — 遺品や資料を初めて現地展示 —

6月4日、富山支部は、富山市河内の播隆上人顕頌碑前で、第32回播隆祭を行った。参加者は、支部会員、「生家の会」の皆さんなど約50名。

午前7時30分頃から支部会員が、現地で準備を開始する。曇り空で、時折小雨が降る状況は、予想外だったが、総務の有澤会員が用意した簡易テント2張りがあり心強い。30分程して、「生家の会」の大作さん親子が到着。今回初めて現地で展示する、播隆上人の遺品や資料を運んできて下さる。富山市大山歴史民俗資料館に所蔵されている、「護持仏」、「播隆肖像画」、「槍ヶ岳絵図」、「播隆筆六字名号」、「川内道場額」などの品々だ。丁寧に取り扱いわれテント内に掲げられた。



遺品・資料の展示



岐阜より見えられた犬飼さんご兄弟

参加者も続々到着する。支部会員の他に、「生家の会」の皆さん、上滝の有志、「しろがね山とスキーの会」の会員、大山歴史民俗資料館の増田国男さんが参加された。(次ページに続く)

目	次
第32回播隆祭を開催—遺品や資料を初めて現地展示—	5月例会山行(一般募集登山)「富山の百山・
.....金尾誠一	1 八乙女山に登ろう」.....吉井一美 9
記念登山・高頭山.....浦井直幸	3 八乙女山の偵察山行.....北田幹夫 10
高頭山登山道整備を行いました.....河合義則	4 「支部創立70周年記念山行」九重連山(中岳、
五支部合同スキー山行・大日ヶ岳.....鍛冶哲郎	5 久住山).....渋谷茂 11
第5回登山教室指導者養成講習会に参加して	支部創立70周年記念事業ブータントレッキング
.....森田裕子	6 .....鍛冶哲郎 14
平成29年度支部総会の報告.....河合義則	7 日本初のヒマラヤ遠征に関わる話(2)・佐伯郁夫 14
緑と残雪の高落場山、高清水山、縄ヶ池.....鍛冶哲郎	7 会員動向 ..... 15
	前期山行計画案内 ..... 16
	編集後記 .....渋谷茂 16

遠路岐阜から、犬飼さんが弟さんとともに、会場に姿を見せられた。初めてお目にかかる方である。犬飼さんは、10年程前に松本・玄向寺が行っている「播隆追慕槍ヶ岳登山」に参加された。その折、脳梗塞を発症し、三日間意識がなかった。それでも帰ってこられるようになって、「播隆上人のお蔭」と話して下さった。播隆上人の徳を、ご自身の体験を通して語られる方に、初めてお会いした。今年、播隆祭に最もふさわしい方に来ていただいたという思いがした。残念ながら都合があり、お参りをされて早々に帰られたので、紹介させていただいた。

開会前に富山新聞、北日本新聞記者の取材があり、山田支部長と大作さんが対応した。なお、播隆祭の記事は、両紙とも翌日の紙面に掲載された。

9時少し前、有澤会員の開会宣言後、河合事務局長の司会で播隆祭が始まった。山田支部長、大作さんの挨拶後、参加者が一人一人護持仏を前に焼香を行った。



山田支部長挨拶



大作さん展示品説明

この後、大作さんが展示品の説明をされた。大作さんは冒頭、「遺品・資料の説明というより、それらを通じて播隆上人はどういう人であったか考えてみよう」と言われた。以下、

『「槍ヶ岳絵図」は200年程前に、専門絵師によって描かれた。注目は、槍ヶ岳開山の道のりが描いてある。当時、3,000mの山を登頂するという事は、資金面も含めて相当の準備が必要であった。

数回の探査後、登頂し仏像を安置した。護持仏と同じ位の大きさのもので、三体であった。絵図では、集合地は信州小倉、宿泊地は林業飯場の山小屋で、2泊している。米1斗、水は雪水、鍋、釜持参であった。2回目は、7月20日登頂、祠に泊り、8月1日、穂高岳に石仏を安置している。穂高岳は、当時も多くの人々が登山していたようだ。絵図では、槍ヶ岳が中央ではなく右端に描かれている。それは、山全体に対する信仰心を表わしているのだろう。

播隆が生家に遺品を送ったのは、死去の二年前。川内道場の再興には六年かけて準備している。「川内道場額」には菊と葵の紋が入っており、天皇家と通じている人が信者にいたと思われる。資金も大きいですが、そうした人を信じさせる人間性は人並みではない。「肖像画」は彩色されており、それなりの絵師が描いている。「名号軸」は120数枚残っている。「南無阿弥陀仏」の「南」の字が独特で、槍ヶ岳の穂先を表現しており、これと似た字はどこにもない。「名号石碑」は80数箇所に残っている。こうしたことは、宗教活動の賜物に他ならない。』

以上、大作さんの熱のこもった話を、大変興味深く聞かせていただいた。そして、長年、播隆を研究してこられた大作さんに、もっといろいろお聞きしたいと思った。また、今回の話で、播隆上人の行跡から、上人が考えられたことや願いに思い至ることが大切である、ということも教えていただいた。

次に、大山歴史民俗資料館の増田さんからは、「資料館には、県外からも多くの見学者があり、今後も紹介に努めたい」と挨拶があった。

この後、参加者全員で記念写真撮影した。続いて車座になって、お供え物や飲物をいただいて、懇親を深めた。今年は例年よりも参加者が多く、また、特別展示にも関心をもっていただいたようで、意義のある播隆祭でした。「生家の会」の大作さんには、常日頃から、山岳会の活動に何かと協力いただいております、今回は展示企画の提案から、貸出、運搬、説明など大変お世話になりました。紙上ですが、厚く感謝申し上げます。大山歴史民俗資料館には、貴重な資料を快く貸し出していただいたことにお礼申し上げます。



懇親会も終わりに近づき、高頭山記念登山が始まるころには、青空が広がる絶好の登山日和となっていた。  
(金尾誠一 記)

## 記念登山・高頭山 1,210m



期日：平成 29 年 6 月 4 日（日）

参加者：木戸、山田、近藤、本郷、浦井夫婦、北田、金尾、森田、宮崎、佐藤、渋谷、藤井、松本（14名他一般参加者5名）、河合、有澤、石浦（播隆祭のみ参加）

登山口から鉄塔さらには杉林の中などはかなりの急登である。しかしタニウツギや足元のカンアオイ、ミヤマナルコユリ、サワフタギなどの花を丁寧に探しながら登れば辛さも忘れる。ただ、

写真を撮ろうとすれば先行者との間隔が開いたり、追い越されたりして取り残されるので焦る。それにしても数十年ぶりに見たキンランには感激した。

三枚滝分岐では、先週 5 月 27 日高頭山登山道整備の折設置されたヒノキの柱に浮き彫りされた立派な道標の前で小休止し、休憩用のベンチとなっている杉の厚板を長い釘で補修した。数年前に改修したという木杭の階段を上り、地図では 986m の地点、通称シャクナゲ平へ急ぐ。ススタケを探しながらの登りであるが時期が過ぎているのか？細くて伸びたものが多い。それでもガスレンジで焼いて皮をむきマヨネーズで食べれば季節感を満喫できる。シャクナゲ平で小休止の後、ミツバツツジやユキツバキ、イワカガミなどを林床に見ながらブナ林を登るのは快適である。所どころ林の合間から滑川の市街地や日本海を望めるのはすばらしく、吹き渡る風が格別清涼で登りやすかった。

山頂では車座になり各々昼食をとる。オーストラリアのミカンやらゼリーなどふるまわれありがたく頂く。  
(浦井直幸 記)

## 高頭山登山道整備を行いました

5月27日(土)に恒例の高頭山登山道整備をおこないました。支部会員8名と会員の友人1名の9名で、午前9時5分から草刈り機、ノコギリ、カマを持ち高頭山登山口を出発しました。登山口で思いがけずアカショウビンの声の歓迎を受けました。2羽の心地良い鳴き声でした。

昨日の雨で登山道は少しぬかるんでいました。今年は雪が多かったのですが、春の天候は晴天が多く木々の成長が例年より旺盛だったせいか登山道の刈り払い量が少し多かったようです。ノコギリでは対応できないくらいのみズナラの倒木もあり、撤去できなくて周辺の刈り払いで支障なく通過できるように対処しました。登山道は一部発電所の導水管と並行している箇所があり、登山道と人工物が共存している箇所も歩きます。途中にアサギマダラの休憩地となっている箇所があり例年、約100メートル近い区間で多くのアサギマダラを観察することができます。今年は食草のフジバカマ等の開花が遅いせいか登山中には確認できませんでした。アサギマダラはフジバカマ、ヒヨドリ



リバナ、アザミ等の蜜を吸蜜します。しかし、下山時に3頭のアサギマダラを確認することができました。刈り払いしながらの登山なので、普通の登山より体力と時間を必要とします。中間点付近で島津会員が、ザックに入れて持ってこられた「高頭山」の道標を設置しました。空海の書体を参考にされたとのことでしたが素晴らしい道標でした。稜線に出たところで、頂上まで登山道整備する班とシャクナゲの群生地がササ等で委縮している箇所を集中的にササを刈って、シャクナゲに光をいれる班に分かれての作業となりました。午後4時頃に全員無事下山して、播隆上人頭頌碑周辺の整備と一昨年の台風で倒れた富山支部創立50周年記念植樹の桜の復旧作業にかかりました。昨年の補修で無事に活着し、樹勢も健全でしたが補修した支柱を組みなおして作業は終了しました。これで6月4日の第32回播隆祭を迎えられそうです。(河合義則 記)

## 五支部合同スキー山行・大日ヶ岳 1,709m

期日：平成 29 年 2 月 25 日(土)～26 日(日)

参加者：山田、永山、鍛冶、近藤、島津、本郷、若尾

岐阜支部担当で行われた今年の合同スキー山行は、2 月 25 日(土)に郡上市高鷲町ひるがのの民宿「甚右エ門」に集合して、26 日(日)に大日ヶ岳で行われた。富山支部からは 7 名参加した。一行は、24 日に二台の車に分乗してひるがの高原にある永山会員の別荘に押しかけて、道中で調達した食材と酒で大いに盛り上がった。

翌 25 日は、昨夜来の羽毛のような新雪がうっすらと積もり、絶好のスキー日和である。朝飯もそこそこに全員で鷲ヶ岳スキー場へ出かけた。スキー場の手前に料金所があり、一台 1000 円を払う。1500 台は収容できると思われる巨大駐車場がすでに 8 割が埋まっていたのには驚いたが、それ以上に驚いたのは、ゲレンデの賑わいである。しかも若い人ばかりである。週末は、土曜日の朝 5 時から日曜の夜 8 時まで、ぶっ通しで営業しているのだそうだ。今時、日本にこんなに繁盛しているスキー場があるうとは、富山には全くわからない。細かく設定されたリフト料金は、概して高くはない。例えば、半日券に相当する 5 時間券のシニア料金は 2300 円。立山山麓のシニア券は一日券で 2700 円である。シニアは半日も滑れば十分だから、「5 時間」は適当な時間なのかもしれない。

午前中滑った後、永山会員の案内で近くの入浴施設にあるレストランへ行き、昼飯をすませて宿に入った。その夜は、恒例の懇親会である。いつものことながら、各支部が持ち寄った地酒を味わいながら、齢を重ねてますます元気な会員諸氏には大いに励まされる。

26 日は、宿の前で全員の記念写真を撮り、それぞれの車で高鷲スノーパークまで行く。昨日滑ったスキー場よりさらに大規模である。15 人が立ったまま乗るゴンドラでスキー場最上部まで行き、スノーシュー班(富山支部からは本郷会員)、スキー班、ともに大日ヶ岳に向かった。今日も、晴天で風弱く、スキー日和である。1,709m の頂上までは稜線をたどるが、頂上手前に小ピークがあり少し下らねばならない。この日は、クラストした雪面に新雪がふんわりと積もっていて、傾斜の緩いところは歩きやすいのだが、シールを付けたままの下降に少々難儀した。とはいえ、累計 300m に満たない登りだから、春めいた陽気の中、さしたるトラブルもなく頂上に達することができた。頂上からは、福井県境の野伏岳から願教寺、三の峰、別山に至る峰々の向こうに、一瞬ではあ



ったが白山の御前峰も姿を見せたが、御岳、劔・立山方面は雲のため見えなかった。下山は、スノーシュー班は往路を下り、スキー班は、頂上から北東の斜面を滑って沢に入り、そこから往路稜線の 1,600m 地点までシールで登り返した。ワンピッチの登りであるが、トップと最後尾に一時間近く差が付いた。幸い、天気晴朗、寒さに震えることもなく待つことができたが、足並みの不揃いは遭難の一因にもなり得るから、混成パーティ、団体

登山の難しいところである。ここからゲレンデまでは一滑りである。さらにゲレンデを滑って、先に下って待っていたスノーシュー班と合流し、解散した。頂上からのスキー滑降は、やはり堅雪上に新雪が 20cm 程積もり、時々、エッジがアイスバーンに届くこと以外は大変滑りやすく、やや急傾斜ながら快適な滑りであった。登りかえした尾根は、取付きの急斜面でシールワークに手こずったが、上部は広くて傾斜も程よく、体力さえあれば、

二、三本滑りたい斜面であった。

今回は、ひるがの高原の賑わいに目を開かれた思いがしたので、位置関係を家に戻ってから地図で確かめた。ひるがの高原 SA スマート IC まで高速道路で行く場合、富山 IC からと名古屋の都心にある名駅 IC から、いずれも 124km と同じなのだ。であれば、豪雪地帯の雪道に行くよりも、太平洋側から乾いた路面を走ってくる方がよほど便利だということになる。首都圏を控えた上越や志賀高原などのスキー場についても同じことが言える。昔のように裏山の斜面で満足していた時代は、北陸はスキー適地であった。しかし、暖冬続きもあって、今の時代、まともなスキー場で滑るには、首都圏、名古屋圏に住む方が有利なのだと納得した。

最後に、富山支部会員は全員遅れることがなかった。近藤会員のタフネスは特筆に値する。素敵な山小屋を提供して下さった永山会員に感謝申し上げます。 (鍛冶哲郎 記)

## 第5回登山教室指導者養成講習会に参加して

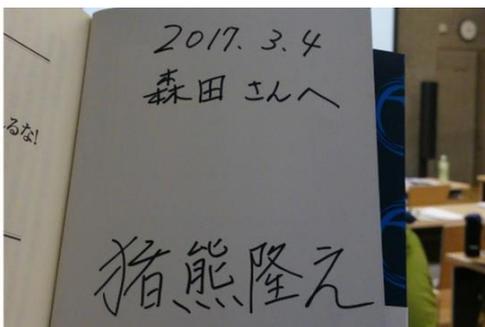
期日:平成 29 年 3 月 4 日 (土) ~ 5 日 (日)

長野県小諸市にある《安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター》にて講習会がおこなわれました。そうです。あの日清のカップラーメンの創始者が建てられたのです。食堂には日ごろから山行でお世話になっているシーフード味等色々なカップ麺が売られていました。

19 名が東京多摩、埼玉を始め四国、京都など各地から参加されていました。



1 日目は座学で①「冬山・春山における遭難例と事故防止策」でした。講師は長野県警察山岳遭難救助隊副隊長で長野県警ヘリ「やまびこ 1 号・2 号」、消防ヘリについてのお話でした。松本空港から現場まで 30 分~1 時



間で到着できるそうです。しかし翌日消防ヘリが訓練中墜落し 9 人亡くなった衝撃的な事故がありました。②「山岳気象の基本と冬山の天気入門」講師は猪熊隆之ヤマテン代表 (気象予報士) でした。いままで疑問に思っていたこと 納得できなかったことがかなり解消出来ました。③講師黒沢徹ガイド (多賀谷ガイドのお知り合いの方) が「リーダーの役割」についてお話をされました。

「人と比べない」、「自分もワンステップ上げる事を考える」、「参加者の目標は多様化していることを認識する」、以上 3 点は心に残りました。

2 日目はバスで車坂峠迄、そこから水ノ登山、籠ノ登山往復をスノーシュー、アイゼンを使用しての実技講習でした。

初めての場所、新しい方々との交流、知識の習得はとても有意義でした。この経験を今後の山行に生かしていきたいと思いました。 (森田裕子 記)

## 平成 29 年度支部総会の報告

期日：平成 29 年 4 月 12 日（水）18:00～

場所：富山電気ビル

参加者：27 名

平成 29 年度富山支部総会が 4 月 12 日富山電気ビルにて開催されました。参加者 27 名、委任状 30 名で総会は成立したことを確認して議事に入りました。平成 28 年度事業報告、収支決算報告、監査報告、平成 29 年度事業計画、予算案と議事は進行し、支部創立 70 周年記念事業(案)の審議となりました。この中で平成 30 年 3 月 25 日(日)に記念式典を開催することが決定しました。併せて平成 29 年度中に記念登山として、九州九重山系とブータントレッキングの詳細が決まりました。その他 70 周年記念誌の発行、記念式典に併せて記念講演会を実施し、この講演会を第 9 回の山岳講演会と位置付けることとなりました。この多彩な行事を実施するために、実行委員会を平成 28 年度より立ち上げ、松本会員を委員長に 5 名の顧問の方と 10 名の実行委員で対応していきますので会員の皆様方のご協力をお願いします。更に昨年 10 月より日本山岳会では準会員制度を発足させ、富山支部においても 2 名の準会員の方が入会されました。これに伴い準会員について支部規約に明記する必要があると、規約改正(案)を審議の上了承されました。平成 28 年度は、亡くなられた会員が 1 名、諸般の事情で退会された方が 4 名いらっしゃいましたが、新入会員の方が 8 名（内準会員 2 名）と総勢 68 名の支部会員数となりました。最後に新入会員の皆さんから挨拶と抱負を発表していただき、総会は無事終了となりました。この後、懇親会で山の話や最近の出来事等について和やかな懇談の時間となりました。今年一年どうぞよろしくお願い致します。（河合義則 記）

## 緑と残雪の高落場山 1,122m、高清水山 1,145m、縄ヶ池

期日：平成 29 年 5 月 3 日(水・祝)

参加者：松本、森田、鍛冶、中道(城端山岳会)

高校を卒業して以来長らく富山を離れていたため、富山の山は不案内である。剣立山、白馬など全国的に名が知られている山を除けば、数年前にこの富山支部に入れてもらった時点で登ったことがあるのは、地元の僧ヶ岳くらいであった。その後、例会山行など山岳会の行事で少しずつ登ったが十指に満たない。この頻度では人生が終わってしまうと、『富山の百山』を頼りに片端から登ることにしたのが一年前である。昨年は、春先の大鷲山を皮切りに、大地山、大倉山、金剛堂山、駒ヶ岳、鋤崎山、大猫山、猫又山、と雪解け前線とともに標高を上げ、大日岳に登った頃に梅雨が明けた。印象深かったのは、金剛堂山である。全山を覆う明るい新緑もさることながら、御岳、乗鞍が意外に近くに見えたのには驚いた。家に帰って地図で確かめたら、金剛堂山から立山、槍穂高、乗鞍はほぼ同じ距離にあることがわかり、コンパクトな富山県も西と東でずいぶん違うものだと感心した。大日岳の七福園では、剣岳を背景にしたお花畑を独り占めして天上の楽園気分は良かったのだが、大日平山荘から大日小屋に登るジグザグで照りつける太陽が老体にこたえた。風呂上りに体重を測ったら 3kg も減っていたので、こんなことを続けていたら体重がなくなってしまうと、山の日の公募登山以外、夏の炎天下は家でおとなしくしていた。秋には山以外の計画がいくつかあったので、追悼登山（千石城山）とクズバ山に登っただけで冬になり、冬眠を決め込んだ。

人間齢をとると時の流れが早くなり、何もしないとさらに早くなる。また春が来たので、再び『富山の百

山』を手に取り、呉西に重点をおいて今年登る山のリストアップを試みた。ところが、意外と登行意欲をそそる山が少ない。「山高きを以て貴からず、樹有るを以て貴しと為す」は私も同感だから、標高の問題ではない。頂上の近くまで車で登ってしまう山が多いのだ。私は貧乏性なのか、往復の車に時間を費やして歩くのが2、3時間ではもったいないと思う。かといって、林道を延々歩くのは嫌だ。植林地よりは自然林、麓に温泉や古刹があるとか、おいしいソバなど地場産品があればもっと良い、と贅沢をいえばきりが無いが、このような私の好みで選んだ今年の第一号が、高落場から高清水、縄ヶ池である。

昨年までは一人で天気の良い日を見計らって出かけていたのだが、人間一人でできることには限りがある、まして寄る年波を考えると一人では心細い。ということで、同行者を募るべく、山田支部長の尽力で整備されていた富山支部のメーリングリストを初めて使ってみたら、松本さんと森田さんが名乗りを上げて下さった。また、吉井さんからの連絡で、当日は城端山岳会元会長の中道氏が途中まで同行して下さり、とても実りある山行となった。

早朝に自宅を出発、途中で森田さんをピックアップして登山口に向かう。7:30の集合に5分遅刻で若杉集落跡の駐車場に到着。松本さんと中道氏が待っておられ、すでに下山予定の縄ヶ池に車を一台置いてきたとおっしゃるから恐縮した。7:45 登山口発、唐木峠までの石畳が残る道は歴史を感じさせる。唐木峠で石畳の道と分かれる。聞いていたとおりのブナの林は見事である。ブナの芽吹きは900m位までで、ところどころに残雪が現れてくるが、登山道と雪の上に足跡らしきものは見当たらない。



9:40 高落場山頂着。他に登山者はなく、剣立山、白山はもちろん檜の穂先が見え、目を転ずれば内灘方面の海も見えている。昼食を広げているうちに2人の単独行者が登ってきた。一人は、砺波市在住の好青年。もう一人は南砺市民病院で外科医をなさっていたという紳士で、このあたりは庭のようにしょっちゅう歩いているのだとおっしゃっていた。10:30 頂上発で道宗道を北へたどる。雪と道が交互に現れるが道を見失うほどではない。ブナの明るい林

の中をいく道は、気楽に歩くことができ森林浴には最適である。しばらく林道を歩いて11:45 陽だまり峠着。中道氏はここで我々と別れて下山されたが、登山口からここまでの間、道をふさいでいる倒木や落ち枝があると、その都度、それらを片付け、標識の傷みなどもチェックしながら、我々を先導し、案内して下さった。このあたりの歴史や自然に精通された氏のお話はたいへん興味深く、心から地域を愛していられるのがよく分かる。11:30 陽だまり峠発。しばらくは雪に覆われた林道らしき道型のところを歩き、縄ヶ池から登ってくる道と合流したら右に折れて稜線に出るのだが、雪があるとわかりにくい。我々は、少し行き過ぎたところで、このまま道型を行くと稜線から離れてしまうと気づき、少し戻ったら標識と雪上に古い足跡があったので、足跡をたどって稜線上の道宗道に出た。



もう一か所雪で道がわかりにくいのは、オエズコの頭と高清水山の鞍部付近であるが、最新の2万5千図には道宗道が正確に出ているので、地図読みを怠らなければ間違えることはない。『富山の百山』にある地図も平面的には正確で、前記の二か所も大体の見当は付く。12:20 高清水

山頂着、12:40 発で下山開始、13:00 道宗道と縄ヶ池との分岐。縄ヶ池へ下っていくと、眼下に縄ヶ池、左手には二条の滝が木々の芽吹きの間に見えてなかなかの絵になっているが、地形は下に行くほど急になり、最後の下りには滑落しそうな箇所があって気が抜けない。13:30 縄ヶ池着。中道氏がおっしゃっていたサワグルミの大木はすぐに見つかった。ミズバショウは咲き始めたところだがそれなりに見ごたえがあり、家族連れなど2、3のグループが来ていた。駐車場にあらかじめ配送してあった松本さんの車で登山口に戻り、井口の花椿の湯で汗を流した。

拙宅から登山口まで往復4時間、この季節、山も里も緑に包まれて実に美しく、運転も苦にならない。十分に元を取った一日であった。  
(鍛冶哲郎 記)

## 5月例会山行(一般募集登山) 「富山の百山・八乙女山に登ろう」 756m

期日：平成29年5月21日(日) 8時30分～15時00分

参加者：一般募集参加者31名、支部会員：木戸、山田、近藤、松本、川田、金尾、渋谷、島津、浦井夫妻、菅田、米谷、森田、佐藤(隆)、瀬川、石溪、吉井、濁川、本郷の19名、総勢50名

一般参加者は朝日町泊から地元南砺市までの県内全域、年齢幅は小学4年生から76歳まで、平均年齢は56.7歳と広範囲のメンバーでの山行でした。

(本郷潤一 記)

8時30分閑乗寺公園管理棟前広場に会員と一般参加者50名が集合しました。開会式の後、四班に分かれて旧閑乗寺スキー場のゲレンデを登り、展望台駐車場に向かいました。



林道を少し行くと、そこには八乙女山登山口(5合目)の標識がありました。登山道を歩き、林道を横断しさらに固定ロープが設置された階段状の道をひたすら登って行くと、所々登山道脇にヒメシャガやチゴユリ、タニウツギ、イワカガミなどが咲いていました。6合目、7合目と進みベンチの所で休みました。竹筒が吊ってあり、熊さんノックといわれ「人が通りますよ」とストックで音を出して行きました。



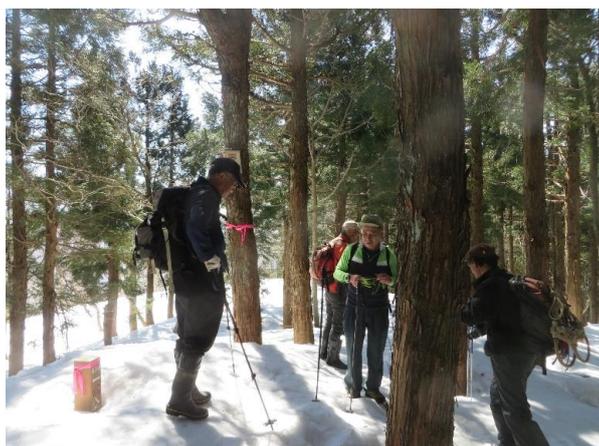
八乙女峠に着くと東屋があり、林道が通っていて、約 20 分の登りで 11 時過ぎに頂上に到着しました。展望はなく、大杉を見て風神堂へ向かいました。風穴があり手を入れてみましたが、風が少し感じられるように思われました。ここでお昼になり、氷見うどんや焼きシャケなどの差し入れをいただいて楽しいひとときを過ごしました。帰りは林道を通りながら同じルート歩き、14 時頃管理棟近くの駐車場にきました。閉会式があり、その後山田支部長が播隆祭記念登山や、山の日記念親子登山について話をされました。新緑の中、初夏を感じさせる心地よい山行でした。(吉井一美 記)

## 八乙女山の偵察山行

期日：平成 29 年 4 月 2 日 (日)

参加者：近藤、本郷、島津、渋谷、米谷、北田

5 月 21 日に予定されている八乙女山募集登山の偵察に出かけてきた。歩き始めはキクバオウレンやマンサクの花、7 合目から上は 3 月にまとまった雪が降ったことからたっぷりの雪が残り、快適な雪上散歩と砺波平野から立山連峰・五箇山にかけての展望を満喫できた。危険箇所、休憩ポイント等をチェックしながら快晴下で楽しい偵察山行となった。



八乙女山頂(756m)



三角点山頂(751.6m)

(コースタイム) 8:15 閑乗寺公園展望広場駐車場---- 8:20 5 合目----8:40 6 合目 (林道と交差) ---- 9:00 7 合目---- 9:30 8 合目---- 9:50 9 合目 (大平の見晴台) ---- 10:05 休憩小屋 ---- 10:25 山頂(756m) ---- 11:00 三角点山頂(751.6m) ---- 11:20~55 大平の見晴台で昼食 ----12:35 6 合目 ---- 12:50 5 合目、展望広場駐車場 (北田幹夫 記)

「日本山岳会富山支部創立 70 周年記念山行」 九重連山(中岳 1,791m、久住山 1,786.5m)

期日:平成 29 年 6 月 8 日(木)~11 日(日)

参加者:山田、本郷、瀬川、渋谷

大阪南港からフェリー「さんふらわあ」で別府観光港へ。心地よい波音が子守歌。夜の瀬戸内海を船は行く。別府観光港に午前 6 時 55 分に到着、大分自動車道九重 IC から長者原登山口に向かう。今回の 70 周年記念山行の計画は長者原登山口から久住山と中岳に登り、往路を戻るのであった。記念山行にふさわしい?! 山行をと、中岳から白口岳を經由して法華院温泉、坊ガツルを訪ねて九州自然歩道を通って長者原ビジターセンターへと、コースタイムで約 8 時間 30 分の行程とする。参加者 4 名全く異存はなかった。ところが登山口に向かう一般道が途中で通行止めとなっている。事前の表示もなく、U ターンして迂回路を通り長者原到着は 8 時 42 分。出発が予定より遅れてしまったが、皆に焦りはなかった。紺碧の空が広がり、ビジターセンターから星生山の山腹が桃色に染まっているのが見える。ミヤマキリシマの花である。



絶好の登山日和。ホトトギスとウグイスに見送られて、9 時 22 分登山口をスタート。30 分車道を歩いて山路に入る。黒い色の土、黒色火山灰土や火山礫の台地を登って行く。ミヤマキリシマが所々に桃色の小さな花を咲かせている。背丈は高くなく葉は小形である。アセビの木がとても多い。コケモモが自生している。九州の山でコケモモが自生するのは、ここ九重連山だけで、日本の生育の南限、国の天然記念物に指定されている。再び硫黄山道路に出る。前方に硫黄山が活発な噴煙を上げ、赤茶けた荒涼とした火山地形が広がっている。左側には標高 1,744.3 m の三俣山がミヤマキリシマを纏い聳えている。黒々とした火山礫の登山道を登って行くと、諏蛾守越という乗越に着く。石を組み立てて作った「すがもり越避難小屋」がある。乗越を吹き抜ける風は心地よく、ミヤマキリシマが火山台地や山肌を美しく飾っている。余りの美しさに歓喜し、もう写真のシャッターを切りまくる。和名は深山霧島、花の色は紅紫色、淡紅色、朱紅色、紫色、白色などがあると図鑑に書かれてある。

休憩の後、峠から下り平らな火山の火口跡のような北千里ヶ浜を歩く。霧に包まれた時のために石を積んだケルンが随所にある。登り坂になり振り返れば三俣山が北千里ヶ浜の奥まった場所に堂々とした山容を見せている。やがて稜線に出て「久住分れ」に到着した。老若男女、たくさんの登山者が行き交っている。多くは牧の戸登山口から登ってきた登山者のようである。久住山避難小屋前の広場で昼食とする。目の前には

左手に中岳、右手には円錐形の久住山が背を伸ばしている。

いよいよ久住山を目指す。岩のゴロゴロした滑りやすい登山道を登る。名残りのイワカガミが数輪、マイズルソウも白い花を咲かせて群生している。深山の針葉樹林の中で見られるものだと思うが、稜線に一塊になって生えている。この辺りのミヤマキリシマは蕾を多く蓄えている。午後1時、標高1,786.5m 一等三角点の山頂に到着した。周囲の山々は、ミヤマキリシマの絨毯が敷き詰められた絶景展望が広がる。阿蘇山が漂う雲間に浮かぶ。許されるなら、ゆっくりと連なる九重の山々を眺めながら、ミヤマキリシマを堪能したい。



山頂を後にして中岳分岐から中岳を目指す。ここの山は、山頂に達するのに時間がかかりそうに見えるが意外に早く到着する。個性的な山容のわりには、コンパクトな空間に納まっているからだろうか。分岐から下って、上宮跡を右下に見て、奇岩がそそり立つ天狗ヶ城

を巻いて御池に出る。満々と水をたたえ神秘的な気配を漂わせる火口湖である。御池を回り込んで岩場を一登りすれば、九州本土の最高峰、標高1,791mの中岳山頂である。山頂からは、九重連山の眺望をほしいままにする。深田久弥はこれら九重の山々を「九重共和国」と呼んでいる。1,700m前後の山々はどれもが個性的で、いまミヤマキリシマのバンダナを巻き着飾っている。



中岳山頂右下には避難小屋がある。頂上からの下り坂は、固定ロープや梯子が掛けられた場所もあるが、難なく東千里ヶ浜に降り立ち、稲星山分岐点に着く。稲星山へは登らず山腹のノリウツギの林に覆われた道をトラバースする。再び反対側の分岐に出て白口岳を目指す。ここからはミヤマキリシマの群生。絶句。図鑑にあるように、さまざまな色合いの花が見られた。花の色といい、株の多さといい、さらには開

花の時期に恵まれたこと、計画を変更したことで得られた出会いに感激ひとしおである。白口岳直下からは鐘形の花をつけたベニドウダンが今盛り。花々の競演に言葉もない。ところが花々に酔いしれた山旅はここまで、標高1,720mの白石岳山頂からの激しい下り坂が待っていた。随所にロープがつけられている。ロープと木々を頼りに滑りやすい黒土の斜面を注意深く降りる。鉾立峠が見えているがなかなか降りきらない。樹木をかき分けて、ベニドウダンには目もくれずによく峠の台地に下った。時刻は午後3時30分を回っている。先を急がねばならない。午後6時には長者原ビジターセンターに着きたい。今晚宿泊する国民宿舎久住高原荘には、予め夕食時間を午後7時に変更の連絡はしてあるが。

銚立峠からは、法華院温泉山荘までは緩やかな石の下り道で、樹林帯の中の木道を過ぎると山荘に着いた。修験寺院が立ち並ぶ、かつての修験道の聖地であった。法華院は明治時代に火災で焼失したが、再建される。標高 1,303m の地にある九州最高所の温泉で人気の山小屋だと聞く。法華院温泉に宿泊した深田久弥は「山の湯の あまたの中の 法華院」と、請われて色紙にしたためた。法華院午後 4 時、行動食を食べて後に備える。

歌手の芹洋子さんが歌って大ヒットした「坊ガツル讃歌」で有名な湿原盆地「坊ガツル」に立ち寄る。テントが何張か張られている。草地に覆われた台地は牧歌的な雰囲気、陽の勢いが落ち山々は陰影をつくり、湿原は旅愁を漂わせている。黄色い花のサワオグルマが草地のあちこちで咲いている。標高 1,643.0m の平治岳が頂頭にミヤマキリシマの帽子を被ったように見える。雨ヶ池越までは緩やかな



樹林帯の登りである。三俣山にさえぎられて陽はあたらずミズナラやリョウブなどの林の中は薄暗い。樹木のトンネルを抜けると「坊ガツル」が望める覗きがある。乗越から夏になるとキスゲやノハナショウブが咲く雨ヶ池の湿原に出た。木道の休憩スペースに老夫婦が休んでいる。時はもう夕刻間近であり心配になる。湿原から再び森の中の道で、根のはった道は結構歩きづらい。もう午後 5 時 30 分を過ぎているのに、まだ登ってくる登山者がいる。尋ねると長者原から 35 分かかったとのこと。下るペースを上げるが、かなりの時間歩いているので足の疲れもあり、ようやくの思いで長者原に出た。駐車場に戻ったのは午後 6 時 10 分であった。陽はまだ高い。念のために久住高原荘に到着の旨電話をかける。長丁場であったが、面々充実感をかみしめていた。お宿での生ビールのおいしいこと。無論料理も。

登山で 70 周年記念行事は終わったわけではない。もう一つの目的である熊本地震の被災地を訪ねることである。何の支援もできないが、せめて気持ちに寄り添いたい。2016 年 4 月 14 日、熊本県熊本地方を震源とする活断層型地震が発生した。前震の 28 時間後に本震が発生、益城町で再び震度 7 を観測した。その後も熊本県阿蘇地方と大分県にかけての地域で地震が相次いだ。益城町に向かう途中、長々と続く阿蘇外輪山の山並みの山肌がいたるところで崩壊している。益城町に入ると、住宅が倒壊した跡は整地されているが、地震の惨状の激しさが想像できる。壁が落ち、瓦が壊れている家の様子があちこちで見られる。道路横の花屋さんの前で車を停車させ、年配の男性に当時の様子を尋ねる。彼は「こんなことがあっていいんだろうか、無残で、むちゃくちゃという言葉が似つかわしい。」と語ってくれた。東北福島県からのボランティアなどへの感謝の気持ちを述べ、短い会話にもかかわらず、地震への恐怖、被害の様子、人が支え合う大切さを痛感させてくれる言葉だった。

益城町から熊本城へ。熊本城は復興工事中で城の周辺から被害の様子を伺う。天守閣、「武者返し」と言われる近江の国の石工集団「穴太衆」<sup>あ の う し ゅ う</sup>が作った石垣の崩壊など、大規模な被害を受けた熊本城、復旧工事に 20 年かかると見込まれている。自然災害は避けて通れない。人は字のごとく互いに支え合わねばならない。今回は被災地を目で見て、「お土産」を買う程度の支援であったが、感じたものの重みは深く心に刻んだ。

(渋谷茂 記)

## 日本山岳会富山支部創立 70 周年記念事業ブータントレッキング

2017年10月28日(土)～11月8日(水) 12日間

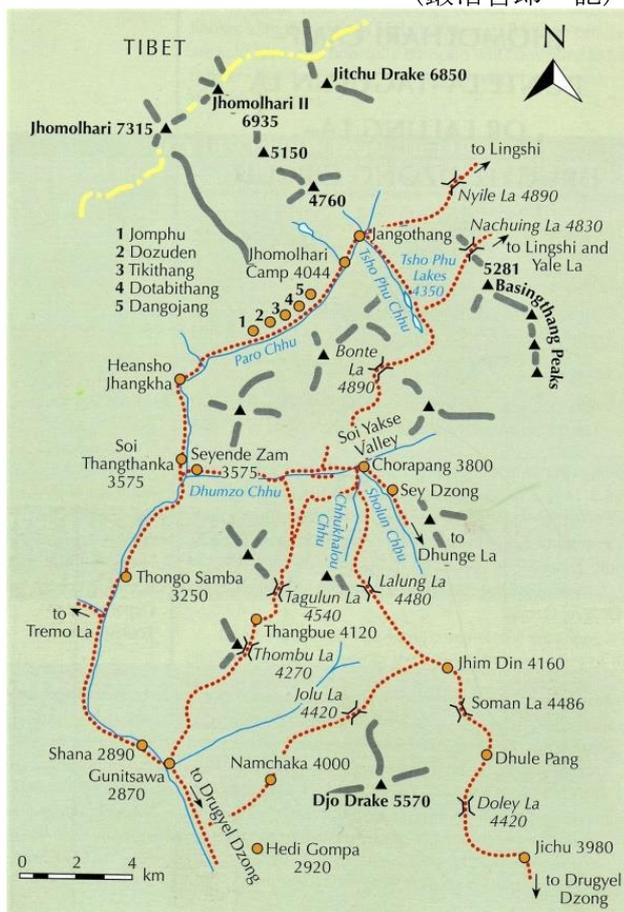
ブータン第2の高峰、ジョモラリ山 7315m のベースキャンプを巡るトレッキング。最高到達地点は 4,890m。乾季なので晴天率が高く、ジョモラリ山はもちろん、峠からはカンチェンジュンガなどネパール方面の展望も期待できます。遊牧民の暮らしや、トレッキングの前後には寺院や博物館を訪れて、ブータンの歴史・文化、生活にも触れることができます。

(鍛冶哲郎 記)

### ■申し込み、問い合わせ先

鍛冶哲郎 黒部市荻生 7 0

kuro\_kaji@ma.mrr.jp 電話 0765-54-2139



## 日本初のヒマラヤ遠征に関わる話 (その2)

佐伯郁夫

前号では、竹節作太(長野県出身)の生家でナンダコート遠征隊のテントが見つかったことから、竹節を中心に述べたが、今回は富山県出身の堀田弥一に焦点をあててみる。

堀田弥一は1926年魚津中学を卒業(24回卒)して立教大学に入る。その頃は大学や高等学校に山岳部が創立され始めた頃で、立教にも山岳スキー部があった。山岳部と改称されたのは1928年である。(山岳部報4号10周年巻頭の文章による)

堀田は、これまでのハイキングクラブのような部を改革し、積雪期登山をめざし、真川から黒部川源流部

の山々や、雪の立山などの記録を山岳部報第1号に載せている。

日本山岳会の第49回小集会で、インドに留学していた長谷川伝次郎の講演「カシミールの山旅」を聞く。それは現地人に化けて全行程4ヶ月を徒歩で中部ヒマラヤを横断した貴重な体験談であった。その後長谷川氏のお宅を誘い合った6人で3日間も訪れている。ガルワールはシッキムと共にポピュラーな地域で毎年登山隊が入っている。遠征費用も安く抑えられることを知り、その地方の地図をくまなく調べ登頂できそうで未踏の山ということに絞って選び出したのがナンダコートである。

立教では辻部長まで含め8名ぐらいの隊員で構成する計画を1936年2月日本山岳会に発表している。大阪毎日新聞と東京日日新聞の後援が正式に決定したことも発表。(日本山岳会報54号)

8名で構成する初期の計画では2万円ぐらいの予算を組んでいたが新聞社の支援金は5千円、その他寄付金を合計しても1万円に満たなかった。個人負担金を出しても行ける隊員は、堀田の他は山縣一雄、湯浅巖、浜野正男の3名だけであった。

堀田の家は、石田村(現黒部市)で綿織物の会社を営んでいて魚津税務署管内で筆頭納税者という豊かな家庭だったので地元での募金活動はなかったようである。ちなみに私の父は魚津中学23回卒業で堀田の1年上級であった。堀田に金銭面の問題はなかったが、気がかりなのは母親がガンで慶応病院に入院していたこと。担当医師によればなんとか遠征中にもつだろうとのことであった。

考えていた半分の隊を出すのがやっとであった。昭和恐慌の影響で多くの企業倒産があり、加えて2・26事件があり、日本は戦争への道を進んでいた。辻部長の指揮の下に全員で寄付金集めに奔走した。目星をつけた校友、紹介された資産家等足を棒にして歩き回った。体よく断られ、居留守を使われ、怒鳴られたことも度々あり、全員一日として休むことはなかったと部報8号に所載されている。入国許可も下り出発の日取りも決まり、6月24日先発として山縣を神戸港から送りだした。

その頃になって、先号で書いた竹節作太が大阪毎日新聞の派遣記者として加わるようになった。本人の希望である。現地取材の仕事としていくのだから費用は新聞社が負担するのが筋だが、新聞社としては不確定な学生によるヒマラヤ遠征に危惧を抱いており、費用は他の隊員と同じ個人負担でということであった。彼に蓄えはなく兄に無心しての参加である。

隊にとって竹節の参加は大きかった。アイモという撮影機材は大変重く高所へ持ち上げるだけでも並大抵でない。彼はクロスカントリースキーでオリンピックに出場した経歴があり体力はある。新聞社への原稿の執筆、35ミリ映画の撮影という経験のない作業を竹節が仕事としてやってくれるのは有難いことであった。堀田らは登山に専念できる。

1936年7月12日大阪商船「へぐい丸」(貨物船)でカルカッタへと向かう。

今回は、いよいよ堀田隊長と竹節記者の活躍による日本初のヒマラヤ登頂です。堀田・竹節のコンビは日本山岳会のマナスル遠征にもつながっていくのです。

## 会員動向

### ○新入会員・準会員

・濁川 暁 にごりかわあき(27歳) 3月入会 会員番号A0033 富山市寺町

きっかけは学生時代に歩いた立山連峰の五色ヶ原です。火山の地質調査が目的でしたが、すばらしい自然の中で過ごしたその時から、山に魅かれ始めました。様々な姿かたちの植物、後立山連峰の眺め、西側に広がった雲海、針ノ木岳の背後から射し始めた朝日、落ちてきそうに大きく見えた星、長くて驚いた早朝の霜

柱、静かな空気の中で遠くに轟いた崖崩れの音…挙げたらキリがありません。その1つひとつが新鮮であり、感動を覚えました。山を降りて人間の生活音に囲まれると、いつもの生活に戻っただけなのに、なんだか寂しくなったのを覚えています。

その後も、学生生活の中で火山を中心に各地の山を巡ることができました。この2年間は、仕事の合間に上手に時間を取れず、ホームシックならぬマウンテンシックになっています。富山に住んで9年目になりますが、恥ずかしながら、まだ雄山山頂まで登ったことはありません。今年こそはと思っています。また、ある山岳会の先輩からは美女平のブナ森の魅力についても伺っています。最近山岳会に入らせて頂き、富山には魅力的な山がこんなにも沢山あるのかと気づかされました。まずは身近な山から挑戦です。登山に関しての知識をはじめ、いろいろと未熟な者です。これから、山岳会においても、人生においても先輩である皆様からたくさん学ばせていただきます。よろしくお願いいたします。

・石溪 秀満 いしたに ひでみつ (56歳) 2月入会 会員番号 16138 富山市石田

はじめまして。私、今年2月に入会し、4月の支部総会の折にも簡単にごあいさつさせていただきました石溪と申します。何とぞよろしくお願い申し上げます。高校で国語の教師をしております。山岳部の顧問として22年目となりました。学生時代までは全くインドア派でしたが、初任校で一緒に新採教員として採用された友人に誘われて以来、夏山を中心に年に数回山歩きを始めてからいつの間にか35年目となりました。近年は高体連登山専門部の関係で富山県山岳連盟にも顔を出すようになり、お誘いを受けて(というより自ら無理にお願いして)キリマンジャロに行くことができたことが一番の思い出です。会員の諸先輩のご指導をいただきながら今後も山に親しんでいきたいと存じます。重ねてよろしくお願い申し上げます。

○松本睦男会員 4月29日 旭日双光章受章、祝賀会：7月15日(土)午後4時 富山第一ホテル

## 前期山行計画案内

- ・2017年度自然保護全国集会(岐阜市・伊吹山)7月9日(日)～10日(月)
- ・7月例会山行(東北の山：磐梯山・安達太良山・吾妻山)7月17日(月・祝)～19日(水)
- ・山の日記念親子登山(富山の百山：高落場山)8月11日(金・祝)
- ・9月例会山行(南アルプス：塩見岳)9月3日(日)～5日(火)
- ・第33回全国支部懇談会(茨城県つくば市・筑波山)10月13日(金)～14日(土)
- ・10月例会山行(追悼登山：山名未定)10月22日(日)
- ・五支部合同懇親山行(福井支部：西方ヶ岳～蝶螺ヶ岳)11月11日(土)～12日(日)

## 編集後記

今年、標高1,000m前後の山に登ると雪が多く残っていた。進むルートが見つからず、引き返そうかと思ったこともあった。季節は巡り「春の儂い花たち」は、山々を飾り確実に命をつないだ。一般募集山行「八乙女山」、支部会員を含めて総勢50名の参加者、“お世話のしがい”があった。ヒメシャガやガマズミの花々が咲き心癒される。山から頂くものは多い。(渋谷茂 記)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第105号

発行者：山田信明 編集者：渋谷茂・北田幹夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 090-4326-6197 Eメール [kawa-mori55@air.ocn.ne.jp](mailto:kawa-mori55@air.ocn.ne.jp)